

名 称	所 在	田面	偏 傾 (m)				貼石	列石	塗 壁 施 設	副 著 品	時 期	参考文献
			台状部	合尖部	墳丘部	周延部						
阿佐大寺 3号	鳥取県岩美町下吉田	伯耆	6.3×7		0.40	2.00	○	○	小明	鷺生後期後晩(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
嘉和	鳥取県倉吉市山根	伯耆	9.6×8.5				○	○	土壤寫	※中川伯耆縣、松井工Ⅱか	②	
馬高浅山 1号	鳥取県米子市尾高	伯耆	9.7×7.1		0.85	1.80	0.50	○	○ 不明	鷺生後期初葉第一前葉(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
日下井名 1号	鳥取県米子市日下	伯耆	10.0×7		0.60	1.20	1.50	○	×	木棺墓4	鷺生後期中葉(中川川、松井V・Ⅲ)	①
宮内 1号	鳥取県東郷町宮内	伯耆	(9.25×17.0)				○		土壤墓6	鷺生後期・鶴玉(中川川、松井V)	①	
吉根見	鳥取県鳥取市吉根見	因幡	40.0×5.0		5.00		○	○ 1基以上		鷺生後期平洋(松井V・Ⅲ)	①	
父原 1号	鳥取県境町父原	伯耆	15.0×13.0				1.20	3.60	○	× 石燈籠1	鷺生後期後晩(今川治中、松井V・Ⅲ)	①
父原 2号	鳥取県境町父原	伯耆	11.0×9.0		1.00	3.00	3.50	×	×	木棺墓2	鷺生後期後晩(中川川、松井V・Ⅲ)	①
洞ノ原 1号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.5×1.2		0.20	0.50	0.65	○	小明	鷺生後期後晩(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
洞ノ原 2号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.1×1.1		0.20	0.30	0.30	○	不明	小明	②	
洞ノ原 3号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.2×1.2				0.20	○	不明	不明	②	
洞ノ原 5号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.6×7		0.20			○	不明	不明	①	
洞ノ原 6号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.3×1.3		0.20			○	不明	不明	①	
洞ノ原 7号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.3×2.1		0.10			○	1基	不明	①	
洞ノ原 8号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	1.3×1.2							不明	①	
洞ノ原 1号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	6.4×5.3		0.40	1.60	0.80	○	不明	鷺生後期初葉(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
洞ノ原 3号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	4.3×3.5		0.30	1.16	0.80	○	不明	鷺生後期後晩(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
洞ノ原 4号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	3.8×3.1		0.30	1.20	0.80	○	不明	鷺生後期後晩(中川川、松井V・Ⅲ)	①	
洞ノ原 5号	鳥取県境町洞ノ原	伯耆	2.0×1.7		0.20	0.60	0.60	○	1基	不明	①	
三峰谷 1号	鳥取県岩美町三峰谷	因幡	26.5×18.0		3.00	3.50	3.00~ 3.30		墓標3基	鷺生土器	鷺生中期末~後晩前晩	②
糸谷 1号	鳥取県境町糸谷	因幡	14.0×12.0		2.00		(3.00~ 4.00)	○	11基	劍・鏡	鷺生後期末(松井V・西柳江J)	①
竹田 8号	岡山県瀬戸町竹田	美作	14.0×5.5		1.50							③④
船山 7号	兵庫県赤穂市船山	播磨	15.0×5.0									⑤
西瀬山 1号	兵庫県加古郡西瀬山町	播磨	9.5×6.0									⑥
風船 2号	福井県敦賀市風船	越前	25.0×20.0		2.50						鷺生後晩(小瀬山J・仏伝?)	⑦
風船 4号	福井県敦賀市風船	越前	14.0×1.1									⑦
小羽山 22号	福井県敦賀市小羽	越前	9.0×6.0		1.20	2.40	3.00		波矢	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
小羽山 23号	福井県敦賀市小羽	越前	8.7×2.0		1.40	2.00	2.00		箱形木棺墓1	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
小羽山 34号	福井県敦賀市小羽	越前	13.0×13.0				1.60		箱形木棺墓2	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
小羽山 30号	福井県敦賀市小羽	越前	26.0×22.0	33.0×29.0	2.70	6.00	4.00		組合形木棺墓1	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
小羽山 35号	福井県敦賀市小羽	越前	7.0×5.0		1.00	2.40	2.00		側竹形木棺墓1	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
小羽山 47号	福井県敦賀市小羽	越前	(4.4)×4.4		0.20	2.00	1.40		鍵矢	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
高柳 2号	福井県敦賀市高柳町	越前	6.2×5.5						鍵矢1子	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
一坂 2号	石川県能登市一坂町	加賀	27.0×18.0	27.0×26.0	1.00	6.00	7.90		鍵矢	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
一坂 20号	石川県能登市一坂町	加賀	11.2×7.0	15.5×15.5	0.50				鍵矢	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
舟前山丘陵No.18	富山県射水市舟前	越前	25.0×23.0						鍵矢	鷺生後期後晩(小瀬山J・傳法式)	⑦	
杉原 2号	富山県射水市舟前	越前	25.0×20.0		3.00	13.60	15.00		朱漆盒	鷺生後期(酒瀬群J・白江式)	①②	
舟前山丘陵No.10	富山県射水市舟前	越前	23.5×22.0						朱漆盒	鷺生後期(酒瀬群J・白江式)	①②	
舟前山丘陵No.6	富山県射水市舟前	越前	19.0×19.0						朱漆盒	鷺生後期(舟前J・白江式)	③④	
重輪 1号	西山市重輪町重輪	越前	21.7×21.7		3.00	9.00	6.00		朱漆盒	接法式・月影式	本著	
京峰 2号	富山県重輪町重輪	越前	21.7×21.7		2.80	9.50	6.30		朱漆盒	接法式・月影式	*	
重輪 3号	富山県重輪町重輪	越前	22.0×21.0		3.00	12.00	4.00 m 以上		朱漆盒	接法式	*	
鏡坂 1号	富山県重輪町重輪	越前	24.1×24.1		4.80	12.00	4.00 m 以上		朱漆盒	月影式	*	
鏡坂 2号	富山県重輪町重輪	越前	19.7×17.3		3.00	6.00	3.75		朱漆盒	月影式	*	
六代古寺	富山県重輪町重輪	越前	24.5×25.4		5.10	10.60	7.20		朱漆盒	月影式	*	

表 8 四隅突出型墳丘墓突出型埴輪墓データ・測量図 引用参考文献

- 四隅突出型埴輪墓突出型埴輪墓データ・測量図 引用参考文献
- 山形考古学研究会 1997「四隅突出型埴輪墓とその時代」第25回山形考古学研究集会
  - 福井市教育委員会 1998「出雲・西谷地区出土埴輪・四隅突出型埴輪墓」
  - 島根県立八云立石風土記の丘、島根県八云立石風土記の丘研究会 2000「秦木田遺跡及急須塚遺跡」
  - 大分大・イスラム文化財修復監修画廊、島根県八云立石風土記の丘研究会 2000「秦木田遺跡及急須塚遺跡」
  - 岩手県教育委員会 1999「新井山・山城谷通塚調査及発掘説明会資料」
  - 安来市教育委員会 1999「島根古墳群発掘調査報告書」安来市埋蔵文化財調査報告書第27集
  - 福井県清水市教育委員会 1997「小山山」
  - 石川県狂歌伝承委員会 1995「福井道歌舞」
  - 島根県教育委員会 1974「高見山古墳群の50周年記念シンボル」高見山の出現既古墳《免天旨要・資料集》
  - 高見山古墳群に開拓する第81回、第82回、表7、表8は、各地の研究者による度量なる調査と並々ならぬ努力によって蓄積されたデータを元に、著者卓氏を中心として既に蓄積されていった一貫に、今回の千房山通跡に関するデータを加えさせていただいたものである。先史雄氏の奥底に深い敬意を表したい。

は時間の経過とともに大きな変化を遂げるが、中国地方では変化が緩やかであり発生当初の形態を維持する傾向がみられ、先学の指摘の通り後期後半に忽然として吉備に出現した全長83m高さ5mに及ぶ倉敷市橋築墳丘墓に連続するような発展は窺えない。北陸内部には肥厚した突出部を始めとする共通性があるが、特に千坊山遺跡群は強い地域性が窺え「千坊山型」とも呼べる独特的の形態といえる。その他、グラフ化はしていないが、山陰では主要な墓は全て四隅突出型墳丘墓であり複葬の場合が多いが、北陸では限られた小地域のみの墓制で特定個人墓である点も大きく異なる。

なお、埋葬主体部と副葬品の組成による比較も、交流関係や地域性を知る上で非常に重要な要素であるが、千坊山遺跡群では未調査であり不明である。ただ第2節第2項で述べたように、出土土器を概観すると収集品ではなく器種構成比率も他地域の四隅突出型墳丘墓とやや異なる。北陸では共通して在地色が強く、吉備と山陰間の特殊器台・特殊壺を始めとする土器交流にみられるような密接な交流は窺えない。北陸での埋葬主体部の具体的な確認例は法仏式期の福井県小羽山30号墓のみであるが、埋葬主体部内部に朱を撒く、多量の玉等の副葬、主体部上に朱を精製する際使用した石を置き大量の土器を積むなど、墳頂部における祭祀は同時期の島根県西谷3号墓に類似することが指摘されており（古川1995）、越前では墳形だけでなく葬送儀礼にも山陰の影響がみられる。同じく法仏式期の富崎3号墓でも、具体的な状況は分からぬが大量の土器を用いた祭祀が考えられる。

## 第2項 北陸の四隅突出型墳丘墓

四隅突出型墳丘墓として確実なものは、福井県に小羽山墳墓群6基と高柳2号墓の7基、石川県に旭遺跡群一塚21号墓の1基がある。富山県では昭和49年に姫中町の北に接する富山市に杉谷4号墳が発見されて以後、千坊山遺跡群で6基を調査しており、全部で7基を数える他、可能性が高いと考えられるものに富山市の吳羽山丘陵No.6・10・18古墳、小矢部市の北一墳墓群の4基がある。北陸全体を通して未調査部分が多く、今後類例が増加する可能性も多い。

北陸の四隅突出型墳丘墓に共通する属性としては、①葺石・貼石が存在しない、②单葬墓である（特定個人墓）、③在地系土器を祭祀儀礼に用いる、④周溝を巡らせる、⑤突出部が肥厚する、⑥石川・富山では台状部は方形を呈する、⑦周溝墓等の他の形態の墓と共存する場合がよくある、⑧各県の限られた地域に集中してみられる、などが挙げられる。受容当初は、福井県では山陰の強い影響が窺えるが、千坊山遺跡群では影響を受けつつも伝統的な周溝墓の形態を踏襲した四隅を掘り残すタイプとして受容しており、当初から在地的様相を強く持つものであった。伝統的墓制を素地にした北陸における一つの受容形態であったと考え得る。⑦については、富山市の杉谷古墳群と杉谷A遺跡（第69図）では月影～白江式期に四隅突出墳・方形墳丘墓と周溝墓群が共存、旭遺跡群では月影式期に四隅突出型墳丘墓と方形周溝墓群が、白江式期に前方後方形墳丘墓と方形周溝墓群が共存している。北陸の墓形態が地域・被葬者によって多様性に富むということの他、ここにも在来の墓制を維持する北陸に共通した受容の特徴が窺える。

北陸における四隅突出型墳丘墓の受容と造営については諸説あるが、前田清彦氏は①山陰・山陽では下位レベルにおいても他地域首長との政治的交流が土器交流を始めとした葬送祭祀に現れているが、北陸では墳形を採用しながらも在地の祭祀土器を用い葬送祭祀の大部分を在来の方式で執行、墓制の属性を選択的に受容しており、交流の基盤が根本的に異なる、②受容・造営は北陸主導型。現段階資料では北陸内部での四隅突出型墳丘墓をシンボルとする首長連合は形成されておらず山陰対北陸一地域の首長間交流にとどまる。地域首長の対外的政治方策の最善の後ろ盾として造営され、それゆえに単発的であり北陸伝統の埋葬習俗を改変することなく墳形のみが強調されたと分析している（前田1995）。

また宇野龍夫氏は、「四隅突出墳（四隅突出型墳丘墓）は当時の地域的な墓の一つとしてだけ理解することは出来ないもの」であり、「社会の中核的な価値を、青銅祭器から個性的な墳丘に転換する最初の試みであり、古墳時代の社会が確立するプロセスの第1歩である」とし、「北陸における方形周溝墓・台状墓の受容」とは大きく異なる意味をもっていたとしている（宇野1999）。

#### 第4節 千坊山遺跡群における在地勢力の成立と衰退

本遺跡群の分析は、古墳出現期の地域的様相を考える上で極めて重要な位置を占めるものであり、そのためにはまず遺跡群を構成する遺跡の分布状況や内容など基本的な諸点を捉え、総合的に考察する必要があった。今回の調査はこのような視点から実施し、その意義は集落と埋葬の両面から弥生時代から古墳時代への移行期の動態を把握する手掛かりが得られたことにある。ここで、その成果を時間的な流れに沿ってまとめるところとなる。

I期（法仏式期）は出現期。富崎グループ（高地性集落）と鍛冶町グループ（平野の集落）が出現し、ムラ長を始めとする特定個人墓として四隅突出型墳丘墓を築造する特殊な墓制が成立した。

II期（月影I式期）は成立期。本遺跡群を構成した4グループ（富崎・鍛冶町・千坊山・南部）が描い、相互に等質的な農業共同体を形成した。各集団は共通して四隅突出型墳丘墓を築造し、同じ集団内の特定個人間においては墳丘規模に身分差が反映された。この墓制は県内ではほぼこの一帯に限られ、限定した分布や「千坊山型」ともいえる地域性から考えると、一地域の自立的共同体が海・陸路ルートで交流した他地域の墓制を固有のものとして消化していくから在地的墓制の中に取り入れたものと推測される。他系統の墓制を一過性に受容した背景には、富山平野が政治的に統合されていく社会的変革期を目前に、他地域の首長連合のシンボル的橢形を掲げることで井田川・山田川合流域の地縁集団の結束を強化し、勢力を他に顯示する目的があったのではないか。

III期（月影II式期）は発展期。大型墳丘墓の動向から、4グループのうち千坊山グループが地域の中核を担うようになったと推定できる。千坊山グループでは三つの集団が独自に造墓した可能性が高いが、その中の特定集団が前方後方形墳丘墓を採用したことは大きな変化であり、次の流動期に向けての兆候とならしうる。

IV期（白江～古府ケルビ式期）は流動・再編期で、最盛期といえる。大きな地域社会の変動が起り、それに伴い集落は再編され埋葬は劇的変化を遂げる。千坊山遺跡が廃絶あるいは移動する中で、富山平野を統括する首長が台頭し、定型化・卓越した前方後方墳が築かれた。弥生時代に小地域内で完結していた階層性は広域な地域一帯において重層的に序列化するようになり、墳丘の形態・規模に複雑に反映された。本遺跡群の大型古墳の導入は能登・加賀より早く、これは地域の統合が迅速に進み在地政権が確立した結果とみられ、それと同時に外来系祭式土器の受容に見られるような対外交流も行うようになる。そして大和を頂点とした汎日本的政治的秩序に参入していくが、その一方で、葺石や埴輪等は受容せず在地系土器が依然として主体を占める状況など地域性も維持される。

V期（高昌式期）は衰退期。大型古墳の造営は古府ケルビ式期の2基のみで断絶し、以降は衰退の一途を辿る。

本遺跡群の変遷は以上になるが、集落と埋葬が密接に関係しながら推移した古墳時代への転換過程を非常に良く表している。特にIII期からIV期への劇的变化は、いわゆる弥生時代から古墳時代への過渡期における“激動”的具体相を示している可能性が高いといえ、この動態に重要な手掛かりが含まれていると考える。

なお、補足であるが、千坊山遺跡群を取り巻く情勢として、勅使塚古墳築造後もなく富山湾近隣の氷見市に造られた柳田布尾山古墳の存在がある（第69図）。この古墳は日本海側最大（全長107.5m）の前方後方墳であり、県内外の広い範囲に影響を及ぼした勢力の存在を示す。また以後、富山県西部の射水・砺波郡地域には前方後円墳が出現し、律令期には射水郡に越中国府がおかれる。千坊山遺跡群の衰退は、このような新しい動向の中で理解できるであろう。ただし律令制下において婦負郡が成立することは、本地域が一定の独自性をもつ地域勢力として存続したことを強く示唆している。

## おわりに

婦中町は婦負(ネイ)郡の中央部に位置する。藤田富士夫氏は、当町で開催したシンポジウムで、千坊山遺跡群を中心とする地域を邪馬台国連合の最端の地にある“奴国”に含まれる地域として“ヌイ国”と呼称し、婦負王国の存在を裏付ける説を提唱された(附章2参照)。本遺跡群を多角的に評価する上で興味深い説であり、教えられることが多い。

本遺跡群は、集落・墓地両面の実態と変遷を地域的(小単位毎)に把握でき、農耕社会が発展し初期国家が誕生するまでの刻々と移り変わる時代の動向を如実に示す典型的事例を提示し得る、貴重な例となるものである。また、地域史を解明する上でも極めて重要な役割を果たすものであり、本報告書の資料の意義はここに尽きる。

しかしながら、この調査は千坊山遺跡群を大まかに捉える為の試掘調査であり、遺跡群の評価と意義付けに不可欠な集落構造、墳丘の内部構造、集落と古墳の対応関係、首長の居住する拠点集落など、まだ把握していないデータも多くある。また、本遺跡群の特殊な墓制に表れる地域性を明確にするには、全国的な時代的背景と墓制の中での位置付けが重要である。今後の研究課題としていきたい。先学諸氏の業績に深い敬意を示すとともに、多くの御批判・御教示を賜れれば幸いである。

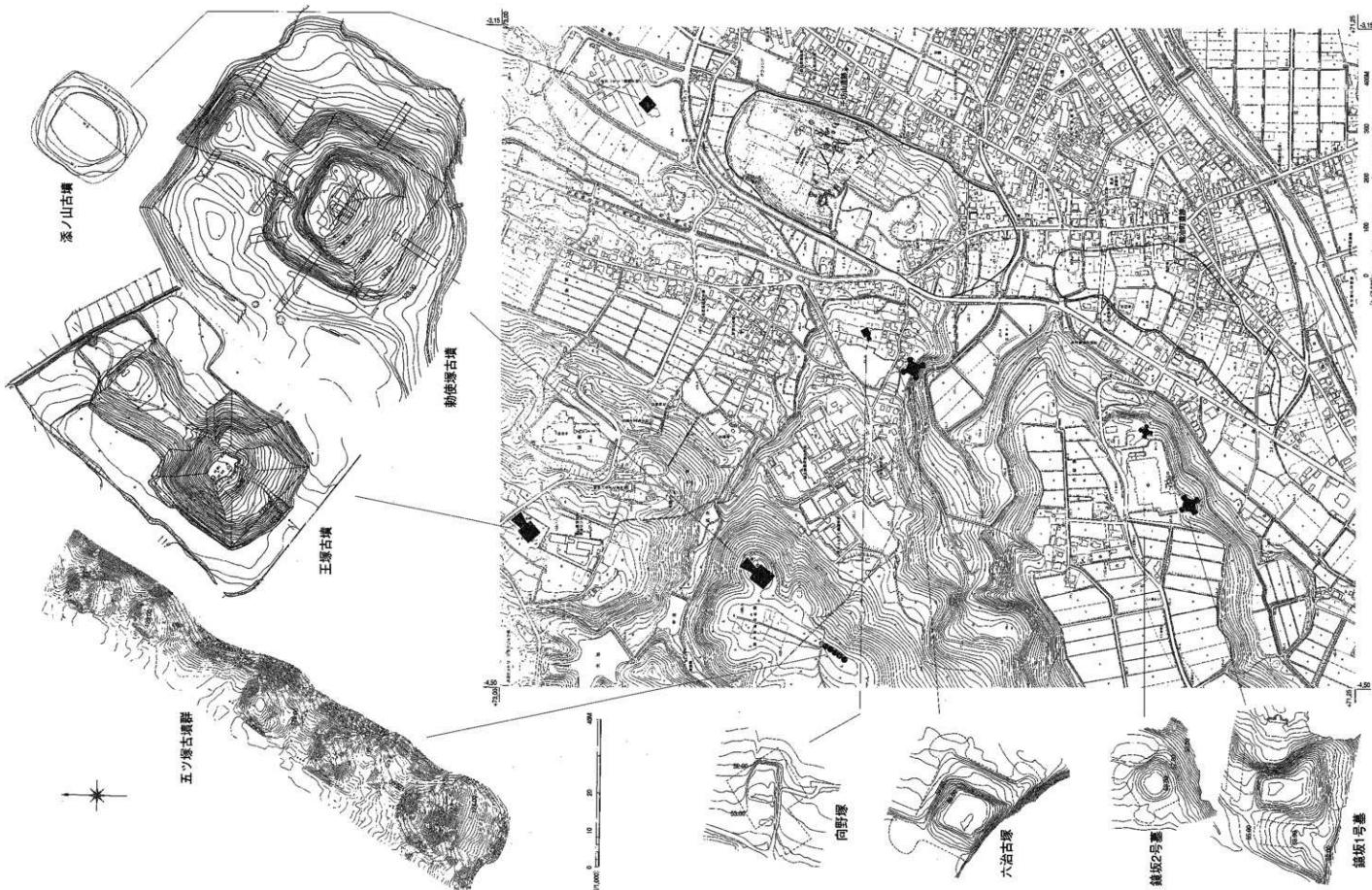
本書をまとめるにあたっては、国際日本文化研究センター宇野隆夫氏より有益な御教示を頂いた。末尾ではあるが、記して深い謝意を表したい。

## 参考文献

- ア 赤塚次郎 1992「東海系のトレスー3・4世紀の伊勢湾沿岸地域ー」『古代文化』44-6  
赤塚次郎 1999「前方後方墳とのかかわり」「前方後円墳の出現」季刊考古学・別冊8  
朝日新聞社 1996「アサヒグラフ別冊戦後50年古代史発掘総まくり」  
石川考古学研究会シンポジウム実行委員会 1986「シンポジウム「月影式土器」について 報告編」  
石川県立埋蔵文化財センター 1987「スタンプ文について」「吉竹遺跡」  
石川県松任市教育委員会 1995「旭遺跡群」  
出雲市教育委員会 1995「出雲・西谷墳墓群シンポジウム 四隅突出型墳丘墓の謎に追る」  
岩美町教育委員会 1999「新井三鷹谷遺跡発掘調査現地説明会資料」  
宇野隆夫 1988「越中の國府・莊家・村落」「歴史と考古学」高井悌三郎先生喜寿記念論集  
宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」「国立歴史民俗博物館研究報告」第40集 国立歴史民俗博物館  
大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団、鳥取県大山町教育委員会 2000「妻木晚田遺跡発掘調査報告」  
岡崎卯一 1966「婦中町添の山古墳の調査」「連絡紙8」富山考古学会  
岡本淳一郎 1986「弥生・古墳時代集落の変遷—北陸地方の住居址群分析ノート」「大境」第10号 富山考古学会  
岡本淳一郎 1991「婦中町宮崎地内採集の遺物」「大境」第13号 富山考古学会  
岡本淳一郎他 1999「佐野台地における古墳出現期の土器について」「富山考古学研究」紀要第2号  
小田木治太郎 1989「北陸東部における古墳時代開始期の土器様相」「北陸の考古学II 石川考古学研究会々誌」第32号 石川考古学研究会  
カ 上市町教育委員会 1984「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町土器・石器編一」  
上市町教育委員会 1984「北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品・総括編一」  
金沢市教育委員会 1995「石川県金沢市上荒屋遺跡I」金沢市文化財紀要120-2  
金沢市、金沢市教育委員会 1996「西念・南新保遺跡IV」金沢市文化財紀要119

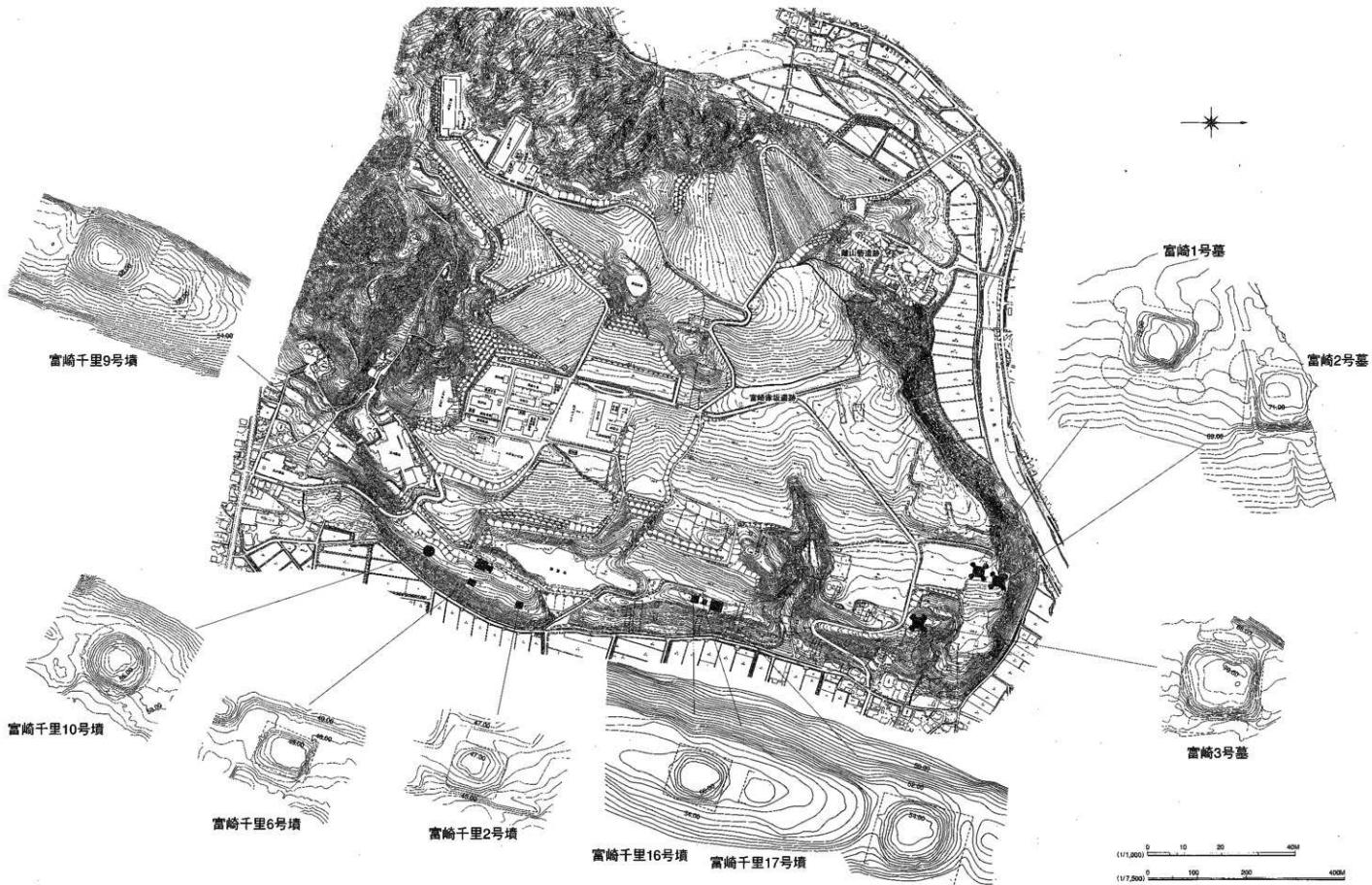
- 金沢市埋蔵文化財センター 1999『戸水遺跡群Ⅰ 戸水ホコダ遺跡』金沢市文化財紀要150
- 久々忠義 1990『婦中町富崎四隅突出型埴丘墓』『富山県埋蔵文化財センター所報 墓文とやまと』第32号
- サ 山陰考古学研究会 1997『四隅突出型埴丘墓とその時代』第25回山陰考古学研究集会
- 財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所 1999『富山県指定史跡勤使塚古墳発掘調査レポート』
- 島根考古学会 1993『島根考古学会誌第10集10周年記念特集号』
- タ 高岡市教育委員会 1992『市内遺跡調査概報』
- 高橋浩二 1995『北陸における古墳出現期の社会構造』『考古学雑誌』第80巻第3号
- 田嶋明人 1986『考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—』『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター
- 富山考古学会 1999『富山考古学会創立50周年記念シンポジウム 富山平野の出現期古墳《發表旨要・資料集》』
- 富山県埋蔵文化財センター 1992『富山県埋蔵文化財センター年報』平成3年度
- 富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告(2)—布目沢北遺跡第3次調査—』
- 富山市教育委員会 1974『富山市杉谷地内埋蔵文化財予備調査報告書』
- 富山市教育委員会 1975『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告』
- 富山市教育委員会 1984『富山市呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』
- 富山大学人文学部考古学研究室 1990『越中王塚・勤使塚古墳 测量調査報告—北陸の前方後円・後方墳の一考察』
- ナ 日本考古学会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
- ハ 水見市教育委員会 2000『柳田布尾山古墳—第1次・第2次発掘調査の成果』水見市埋蔵文化財調査報告第29冊
- 福井県清水町教育委員会 1997『小羽山』
- 福岡町教育委員会 1998『富山県福岡町下老子川遺跡発掘調査報告書』福岡町埋蔵文化財報告書第7冊
- 藤田富士夫 1999『高志の中の出雲文化』『海—海流に乗った恋物語—』島根県立八雲立つ風土記の丘夏季特別展
- 婦中町 1967『婦中町史』
- 婦中町 1997『婦中町史』
- 婦中町教育委員会 1986『富山県婦中町富崎・千里地区埋蔵文化財予備調査概要』
- 婦中町教育委員会 1989『新町王塚占墳団』
- 婦中町教育委員会 1995『千坊山遺跡(1)』
- 婦中町教育委員会 1996『千坊山遺跡(2)』
- 婦中町教育委員会 1998『千坊山遺跡(3)』
- 婦中町教育委員会 1998『富山県婦中町南部I 遺跡発掘調査報告』
- 婦中町教育委員会 2000『富山県婦中町南部I 遺跡発掘調査報告II』
- 婦中町教育委員会 2000『富山県婦中町県営担い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告書—婦中南部地区・千里地区』
- 古川登 1994『北陸の四隅突出型埴丘墓について』『大境』第16号富山考古学会
- 古里公民館・婦中町教育委員会 1994『ふるさと一郷土の歴史と文化・再発見—』
- マ まつおか古代フェスティバル実行委員会 1997『発掘された北陸の古墳報告会資料集』
- ヤ 安来市教育委員会 1999『荒島古墳群発掘調査報告書』安来市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 谷内尾晋司 1983『北加賀における古墳出現期の土器について』『北陸の考古学 石川考古学研究会誌第26号』
- 石川考古学研究会
- 八尾町教育委員会 1997『翠尾Ⅰ遺跡発掘調査報告書1』
- 雄山閣 1996『日本土器事典』
- 吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁[古代編]』六興出版
- ワ 渡辺貞幸他 1998『加茂岩倉遺跡と古代出雲』季刊考古学・別冊7





第83図 羽根・新町・長沢・外輪野地区における千坊山遺跡群分布図(1/7,500) 及び墳丘墓・古墳測量図(1/1,000)

※全て方角は合致する。



第84図 富崎丘陵における千坊山遺跡群分布図(1/7,500)及び墳丘墓・古墳測量図(1/1,000)

※全て方角は合致する。

富崎千里18号墳

表 9 賽物標示表①

表10 遺物觀察表②





表13 遺物觀察表⑤

表14 遺物觀察表⑥

表15 造物觀察表(7)



番号	地名	標高 m	川上流域	形狀		色		調		外		内		風		雨		雪	
				面積 (ha)	周長 (m)	岩	砂	泥	砂	砂	泥	泥	砂	砂	泥	砂	泥	砂	泥
323	高野山	74	無河川	15.00	9.30	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
323	高野3分岐	71	T-11N/4	21.00	13.20	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
324	千代山流域	15.00	5.60	無河川	14.00	10.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
1	千代山流域	15.00	3.00	無河川	15.80	2.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
2	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.80	1.20	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
3	千代山流域	15.00	1.00	無河川	14.00	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
4	千代山流域	15.00	1.00	無河川	13.00	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
5	千代山流域	15.00	1.00	無河川	13.00	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
6	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.80	1.70	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
7	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.80	1.70	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
8	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.80	1.70	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
9	千代山流域	15.00	1.00	無河川	13.00	2.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
10	千代山流域	15.00	1.00	無河川	21.80	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
11	千代山流域	15.00	1.00	無河川	20.50	9.10	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
12	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.00	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
13	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.80	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
14	千代山流域	15.00	1.00	無河川	10.00	12.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
15	千代山流域	15.00	1.00	無河川	13.00	1.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
16	千代山流域	15.00	1.00	無河川	7.00	3.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
17	千代山流域	15.00	1.00	無河川	4.00	12.00	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
18	千代山流域	15.00	1.00	無河川	25.00	10.40	岩	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
19	千代山流域	15.00	1.00	無河川	0.30	12.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
20	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.00	12.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
21	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
22	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.00	0.90	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
23	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.10	0.70	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
24	千代山流域	15.00	1.00	無河川	17.80	0.90	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
25	千代山流域	15.00	1.00	無河川	13.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
26	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.00	12.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
27	千代山流域	15.00	1.00	無河川	19.60	2.60	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
28	千代山流域	15.00	1.00	無河川	6.4	2.40	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
29	千代山流域	15.00	1.00	無河川	1.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
30	千代山流域	15.00	1.00	無河川	10.80	4.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
31	千代山流域	15.00	1.00	無河川	11.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
32	千代山流域	15.00	1.00	無河川	15.70	2.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
33	千代山流域	15.00	1.00	無河川	1.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
34	千代山流域	15.00	1.00	無河川	1.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
35	千代山流域	15.00	1.00	無河川	10.80	4.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
36	千代山流域	15.00	1.00	無河川	11.00	1.00	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂
37	千代山流域	15.00	1.00	無河川	—	—	砂	砂	泥	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂	砂

## 附章1 富崎千里古墳群における地中レーダ探査

富山大学大学院 人文科学系研究科修士生 岸田 憲

富山大学理学部助教授

酒井英男

### 1. はじめに

今回、我々は、富崎千里古墳群内の6号墳と9号墳において探査を行った。探査の目的は、その主体部の確認、そして6号墳においては、その周溝の形態を確認すること、9号墳ではその墳丘構造の把握であった。

今回用いた地中レーダ探査は、電磁波を地中に送り込みその反射の様子を捉えることにより地下を調査する方法である。これは誘電率の差異を対象とするものであり、土層構造から遺構、遺物の探査まで幅広く応用できる探査法である。

### 2. 探査の概要

今回の探査に使用した装置は富山大学理学部所有のカナダ Sensor & Software 社製 pulse EKKO1000 と同社 pulse EKKO IV であり、使用したアンテナの周波数は225MHzと200MHzである。また、天理大学考古学研究室よりアメリカ G.S.S.I. 社製 Sir-2 を借用し、探査を行った。こちらのアンテナ周波数は400MHzである。探査は平成12年11月と平成13年1月、2月に実施したが降雪のため散発的に行わなければならなかった。

6号墳での測線設定は図1のとおりである。pulse EKKO 機による16本の測線を設定した。使用アンテナは主に225MHzであるが、測線01～05では200MHzも併用した。測点間隔は0.1mである。また墳丘上に東西南北6.5×9.5m の探査グリッドを設定した。ここではSir-2 機を使用、400MHzのアンテナを使用した。

9号墳ではpulse EKKO 機は9本の測線を設定した(図2)が、後に主軸に沿って1本追加した。また後方部墳頂にSir-2 機用に測線間隔0.5mで11.0×8.0mの探査グリッドを設定した。すべての測線は任意の基準となる点から設定している。

探査深度を求めるためpulse EKKO IV 機および200MHzのアンテナを使用し地中の電磁波の伝播速度を測定するCMP探査を実施した(Annan and Cosway, 1992)。その結果6号墳周囲の土壤における電磁波の伝播速度は0.060m/ns、9号墳後方部では0.035m/nsと推定できた。本探査ではこれらを利用して探査深度を設定した。なおここで求めた速度は、200MHzの電磁波の地中伝播速度でありSir-2 機による400MHzアンテナでの探査結果には当てはまらないことを記しておく。

### 3. 地中レーダ探査の結果と考察

#### 〈6号墳周溝〉

図3-1に測線02の探査結果を示す。探査始点より約2.5m地点から8m地点に幅広で溝状に落ち込んだ構造が認められる。最深部の深さは地表より約1.7mである。これは試掘トレンチにおいて確認された周溝の特徴とよく合致している。なお、4.8m～6.4mの溝底における穂を伏せたような強い異常応答は土層構造を捉えているとは考えにくく、例えば大きな穂が溜まっているような状態を捉えていると推定される。古墳西側斜面には比較的大きな穂が所々見られたが、これが転落し溜まったものであろうか。6号墳西側・南側の測線04および05でも同じような溝と思われる構造を確認した。測線04では1.0m地点より右下がりの構造が見られる。墳丘側の立ち上がりは不明であるが5.0m地点あたりかと考えられる。測線05では2.5mから6.8m(6.0m?)に溝状の構造が見られる。以下測線13、16、19でも溝状の構造を確認した。しかし測線19ではやや不鮮明であった。これらのことから、東側・北側ではかなり溝が浅くなっている、幅も狭くなっているという探査結果が得られた。

#### 〈9号墳盛土構造〉

図4-1に測線02の結果を示す。これを見ると約8.0m地点よりほぼ水平に走る土層の境界が見られる。この層は

0.0mから3.0mあたりにかけて見られる地山の土層構造と平行に走っており人為的改変(盛土)が加えられていない旧表土のラインであると解釈した。それより上部が盛土とすると、その厚さは後方部墳頂で約1.4mとなる。前方部側には盛土の構造は見られないことからレーダ探査の結果から言えば、地山を削りだして成型したのではないかと考えられる。また盛土中にも何らかの境界が見て取れるが、これは盛土の中でも土質が大きく異なる境界を捉えたものであろう。図4-2は測線02に直交する測線05の探査結果である。ここでも盛土の厚さは約1.4mとなり測線02の結果と整合している。

#### 〈6号墳墳頂〉

墳丘上では6.5×9.5mの探査グリッドを設定し、南北、東西方向にそれぞれ0.5m間隔で計34本の測線を設定した。それぞれのProfile図より一定時間内における応答の様子を取り出し平面図化したのがSlice平面図と呼ばれるものであり、図5-1にその一部を示した。探査範囲内に散発的に強い応答が見られ、地表近く0~10nsまではトレンチの影響が強く見られた。またここで注目されるのはSlice平面図の35nsから(地表下約60cm~)探査区北西に見られるやや強い応答である。同じ箇所に連続して現れることから何らかの遺構、遺物の可能性が高いと思われる。

#### 〈9号墳後方部墳頂〉

後方部上には11.0×8.0mの探査グリッドを設定し南北、東西方向に0.5m間隔で計40本の測線を設定した。図5-2がそのSlice平面図である。ここでも0から10nsまでの深度ではトレンチの影響が強くでていた。深度が深くなるにつれて散発的に反応が現れるが、ここで注目したのは35~50nsのSlice図である。図5-2に応答の強さの等高線図を示した。これを見ると北西~南東方向にのびた異常応答がみられる(図中破線で示す)。これは主体部を捉えている可能性も考えられる。

#### 4.まとめ

6号墳の周溝の様子についてはレーダ探査によって把握することが可能であった。南西側から西側に幅広でやや深い溝が認められるものの、他の部分は不鮮明であり、浅く小さな周溝がめぐるに過ぎないのであろう。今回は測線数、使用したアンテナが限られており、全体的な周溝の様子を復元するのは困難であるが、今後測線を増やし、浅くなる部分ではアンテナ周波数をかえるなどの方法を取れば十分可能であると考える。墳丘上の探査はいくつかまとまった強い応答を確認し、何らかの遺構、遺物が存在する可能性の高い箇所を指摘できた。

9号墳の構造探査では盛土の厚さ、またその構造を推定することが可能であった。また後方部墳頂における探査でも6号墳と同じく中央部に主体部かと思われる異常応答地点を確認できた。

あくまで探査結果自体は理化学的な反応を捉えているに過ぎないため、その解釈には慎重さが必要であり、断定することはとても困難である。今回の探査で得られた結果が何を捉えていたのか、今後の発掘成果を期待したい。

#### 謝 辞

今回の探査を行うにあたり、婦中町教育委員会、ならびに富山県埋蔵文化財センター岸本雅敏氏、天理大学置田雅昭先生をはじめ多くの方々のご指導、ご協力をいただきました。末筆ながらここに深く感謝申し上げます。

#### 参考文献

- Annan, A. P. and Coway, S. W. 1992: Ground penetrating radar survey design, Annual Meeting of SAGEEP, 1-12

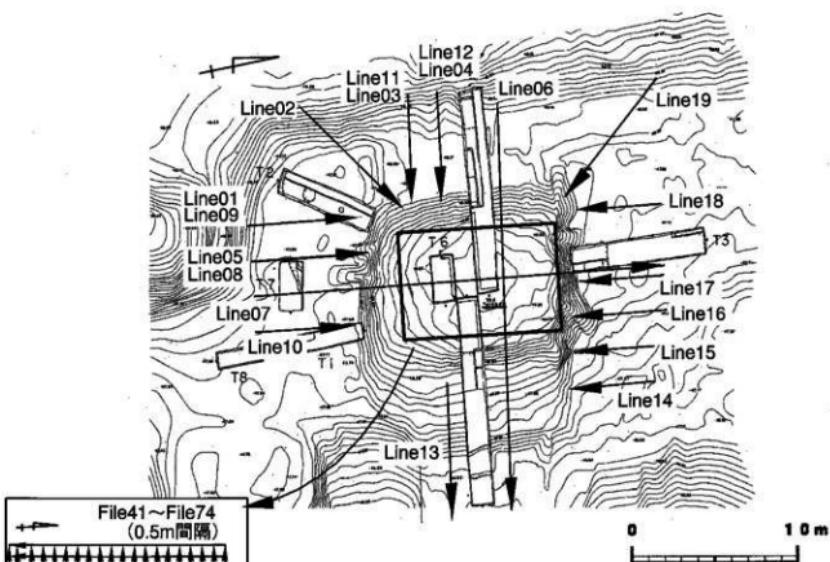


図1 富崎千里6号墳 測線配置図

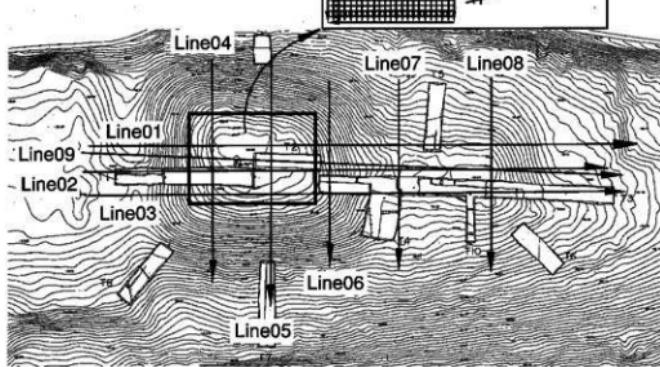


図2 富崎千里9号墳 測線配置図

0 10m

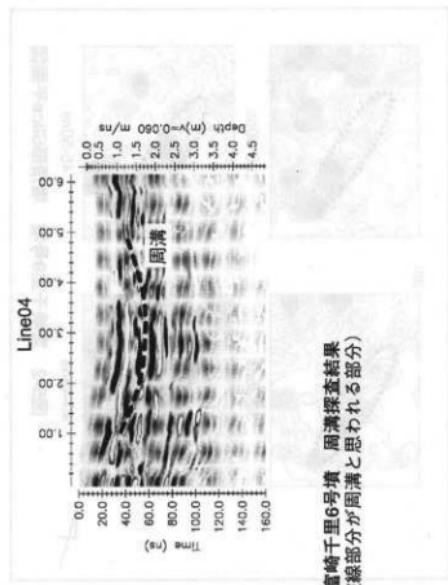
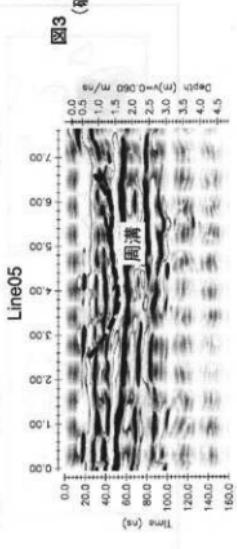


図3 富崎千里6号墳 周溝探査結果  
(破壊部分が周溝と思われる部分)



盛土の中の土質が異なる境界?

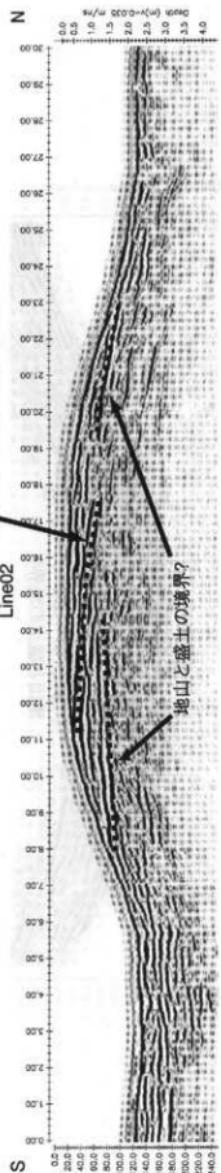


図4-1 富崎千里9号墳 墓丘探査結果! (南北ライン)



図4-2 富嶽千里9号墳 墓丘探査結果2（東西ライン）

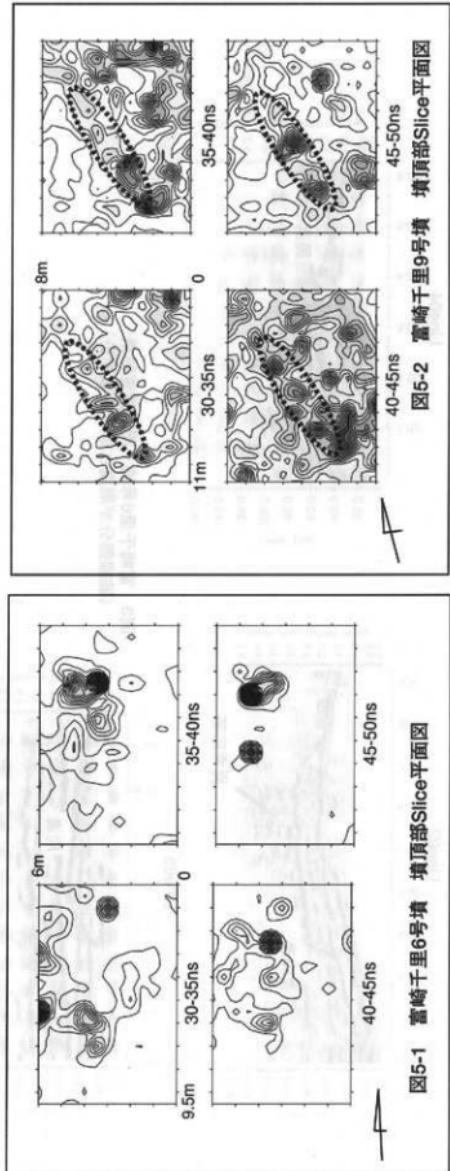


図5-1 富嶽千里6号墳 墓頂部Slice平面図

図5-2 富嶽千里9号墳 墓頂部Slice平面図

## 附章2 ミニシンポジウム『卑弥呼の時代を生きた人々』概要

平成13年9月22日18:30より、これまで実施してきた千坊山遺跡群の調査結果を広く一般に公開する為、シンポジウムを開催した。基調報告ではOHPを交え調査概要を報告した。パネルディスカッションでは当時交流のあった他地域の状況の報告をまじえ、千坊山遺跡群の評価についての見解を発表した。ここではその一部を紹介する。

司会者 荒木 良一 氏（北日本新聞社）

パネリスト 久々 忠義 氏（小矢部市教育委員会）

（五十音順） 高橋 浩二 氏（富山大学考古学研究室）

中原 齊 氏（鳥取県教育委員会）

西井 龍儀 氏（富山考古学会）

藤田富士夫 氏（富山市埋蔵文化財センター）

古川 登 氏（福井県清水町教育委員会）

片岡 美子（婦中町教育委員会）



《内 容》

久々 忠義 氏

①千坊山遺跡は北陸でも有数の弥生集落である。24棟の堅穴居は、2世紀末から3世紀の中頃までの約80年間営まれた。3家族が3世代にわたって暮らし、一時期には8棟程度（少なくとも約50人）があったと推定する。周囲の段丘上には墳丘墓が3基あり、家族ごとの墓と考えられる。

②六治古墳（四隅突出型墳丘墓）の形態は福井県に近く、山陰の墓制をもつ先祖が越の國の中核である福井平野で開拓し、子孫が東への領域拡大の為日本海を北上し神通川・井田川を経て、この地にたどり着いたのではないか。先祖の土地との繋がりを持ち、鉄器の鉄は山陰の親戚から手に入れて、開拓を大規模に進めたのだろう。人々は月影式の土器を使用し、赤彩した台付細口壺や装飾壺を使った独特の祀りを生み出している。人々の出身地は、墓の形から山陰（四隅突出型）、東海（前方後方形）、近畿（前方後円形）、瀬戸内（円形）の西日本各地である可能性がある。

③千坊山遺跡群の開拓開始から80～100年たった頃、60mを超える王塚・勅使塚古墳が千坊山集落のすぐ山の上にできる。これらは3世紀末、千坊山集団のなかから婦負の国を領域とする王が誕生したことを示す。この時期、神通川、井田川、山田川、熊野川の上流には50余りの遺跡があり、15～16位の集団がいたと考えられるが、王塚・勅使塚レベルの古墳ではなく、当時婦負郡に中心勢力がありこれらの地も婦負の国の領域だったと考えたい。

高橋 浩二 氏

①「魏志倭人伝」にある倭国大乱後、戦いを通じて各地が統合される。婦中町には四隅突出型墳丘墓等の巨大墓があるが、このような文化は地域の統合が早く進んだ地域では早く現れ、そうでない地域では遅れる。婦中町には早い時期に巨大墓が出現しているので、地域の統合が早く順調に進んだのではないか。

②六治古墳が造られた時期には、北陸各地で特定個人の為の墓が形成され始める時期にあたっており、千坊山遺跡群に造られた四隅突出型墳丘墓は周辺をまとめるようなリーダーの墓といえる。古墳時代初期には県内を二分するような地域性が形成されるが、そのうち今の婦負郡を中心とする地域を治めていたのがこの地の首長であると推定できる。統治範囲には、神通川流域一帯も入るかもしれない。

### 中原 齊 氏

- ①山陰地方の全体像が分かる遺跡には日本最大級(170ha)の遺跡である島根県の妻木晩田遺跡がある。本遺跡は標高90~150mの山の上にある1~3世紀を中心とした弥生時代後期の集落で、7地区から構成される。仙谷地区、洞ノ原地区、松尾頭地区からは34基の弥生墳丘墓が、妻木新山地区、妻木山地区、小真石清水地区、松尾城地区からは約350程の堅穴住居跡、倉庫跡が見つかっている。これらの地区はそれぞれ異なる役割を担い集合することで1つの大きなムラを構成していたと考えられる。また、墳丘墓と440m程離れた居住域で、同一個体の土器片が出土しており、墓で割った土器を持ち帰るなどしたの可能性も考えられる。この事から、住居群と墓は常にセットであることが分かる他、現在に通じる慣習があったとも考え得る。
- ②北陸と山陰の土器は、微妙な地域差はあるものの非常に似ており、地域間の交流を物語っている。
- ③山陰地方の四隅突出型墳丘墓には、貼石がある点が北陸と違う。踏み石状の突出部を通路にして墳丘に入りし、祀りや葬儀をしていたと推測される。また、出雲市の四隅突出型墳丘墓からは吉備や北陸の土器が出土しており、これらの地方から土器を携えて王の葬儀に参列した人がいたのではないかと考えられている。

### 西井 龍儀 氏

- ①墳墓・古墳の規模を比較する実験的方法として、1/500,000の地図に全長を2乗して0.01を掛けた数を直径とした円を古墳中心に描くと、支配した地域、関連地域が視覚的に表現できる。全長が20m程度の弥生墳墓では直径4km、全長50mでは25km、日本海側最大の水見市柳田布尾山古墳のような全長100mを超えるものになると100kmを超える範囲が影響範囲となる。この方法で考えると、全長66mの勅使塚古墳は婦中町から富山湾までの範囲で井田川、神通川流域を包括する。越中では、西は柳田布尾山古墳、東は王塚・勅使塚古墳が勢力を2分していた。
- ②越中では西部に前方後円墳、東部には前方後方墳が多いという報告がされているが、能登半島ではその時期に前方後方墳と前方後円墳が造られている。また、4世紀の終わり頃には加賀で北陸最大級の前方後円墳が造られている。
- ③墳墓・古墳は、越中町の婦負郡、永見市を含めた射水郡、小矢部市周辺の砺波郡、まだ希薄だが確認されていない古墳があると考えられる上市町、舟橋村を中心とする新川郡の4つの大きなグループにまとまる。中でも婦負郡には早い段階から非常に大きなものがまとまって造られている。

### 古川 登 氏

- ①北陸の四隅突出型墳丘墓としては、福井で確実なものが7基（小羽山6基、高柳2号墓）、不確実なものが4基（小羽山4基、片山島越3基）が、石川で確実なものが1基（一塚21号墓）、不確実なものが1基（一塚38号墓）が確認されている。北陸で最古のものは福井の小羽山30号墓で、法式期の築造である。本墓では、埋葬施設上に大量の土器が出土した他、棺内には朱が撒かれ、玉類や短剣など他地域との交流を示す副葬品が出土した。小羽山墳墓群の四隅突出型墳丘墓は、山全体を削り出し盛土して整形し、突出部は“しゃもじ”型を呈する。一方、婦中町の四隅突出型墳丘墓は“おたま”型であり、類似している。北陸の四隅突出型墳丘墓は、その形態の共性から“北陸型四隅突出型墳丘墓”ともいえる。
- ②現在調査中の一塚約15mを測る方形墓の棺内から出土した副葬品の状況から、富山県ではまだ四隅突出型墳丘墓が築造されている頃、福井では既に古墳時代に連続するような墓が出現していることが分かってきた。これについては後日正式に発表したい。



## 藤田 富士夫 氏

- ①漢の時代に出てきた来世觀であり、新しい王墓思想である靈魂と肉体の分離思想を探り入れた、魂が昇天する為の装置として視覚的に編み出されたのが、外界と遮断した周溝の成立である。これは、北陸と東海、畿内大和という3つの地域と理念を同じくするものである。婦中町の四隅突出型墳丘墓の在り方は、古墳文化の先進思想を先駆けて採用したことを示している。
- ②『魏志倭人伝』に記された邪馬台国連合に属する28の國々の最後に「鳥奴國」「奴國」が出てくる。鳥奴国については、石川県と福井県の境界辺りにある江沼郡は、「先代舊事本紀」で「ウスカニ」と読む。教賀は、元は「ツヌガノクニ」と読み、「日本書紀」によると北陸道は「クヌカノミチ」とされる。すなわち「奴(ヌ)」は、富山県と石川県から西方の国々に付いていると考えられる。一方、婦中町周辺には姫負王国があったと考えるが、姫負(ネイ)は、「ヌイ」という古訓がある(『和名類聚抄』より)。邪馬台国は、北陸から山陰までの地域を「連合」の中に取り込んでいる国家で、それを構成していたクニの1つとして、特有な精神思想を持ったヌイ国があったと考える。



「鳥奴國と『奴國』の想定地(試案)

(「魏志倭人伝」)

「女王自是北は、其へべ、道里無事得べきも、其の南は連熱して作を得べからず。」

「二十、(略名)故に國有り。此れ女王の種界のくる所なり。その間に海無有り。」

北 主 行 十 月 行 一 月	東 北 西 南	(空洞地)	海岸	諸河の源
「御身り前に至」 までの国々 (北高麗→北高麗)	女 王 國	<ul style="list-style-type: none"> <li>→ 山東高麗→巴支支那→伊那國→都支國→馬奴國</li> <li>② 行古都國→不呼稚→麻奴國</li> <li>③ 对麻國→麻奴國 (ヤナ国名)</li> <li>④ 丹那國→麻奴國</li> <li>⑤ 佐久國→麻奴國</li> <li>⑥ 志那高麗→財日國→巴利國→支地國→馬奴國</li> </ul>		青 森 県

「魏志倭人伝」の「夷國」と位置関係(試案)

藤田富士夫氏発表資料より抜粋



1.周辺の空中写真(向野塚より南を望む)



2.周辺の空中写真(六治古塚より北を望む)

1. 六治古塚  
全景  
(北東から)



2. 六治古塚  
墳丘東側盛土状況  
(T1・T9、南東から)

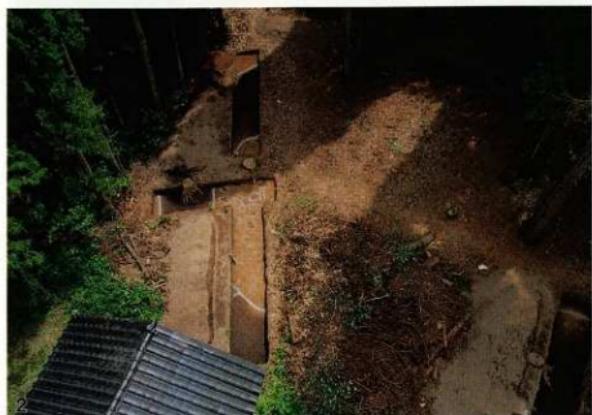


3. 六治古塚  
墳丘西裾  
(T8、北西から)





1. 六治古塚  
北突出部  
(T7・T13、南から)



2. 六治古塚  
東突出部  
(T4・T5・T11、北から)



3. 六治古塚  
墳丘頂部  
(T12、南西から)



4. 六治古塚  
墳丘北東端  
(T6、南西から)

図版3 六治古塚

1. 向野塚周辺の  
遺跡分布状況  
(南から)



2. 向野塚  
後方部全景  
(T1~T6、南上空から)



3. 向野塚  
後方部全景  
(T1~T6、西上空から)





1. 向野塚  
全景  
(T7~T15、南東上空から)



2. 向野塚  
前方部から後方部を望む  
(T8~T10、南から)



3. 向野塚  
墳頂部より前方部を望む  
(T7~T10・T13、北東から)



1. 向野塚  
SK01  
(T4、南東から)



2. 向野塚  
後方部北西縁  
(T4、北西から)



3. 向野塚  
墳頂部墓壇  
(T2、西から)



4. 向野塚  
北西くびれ部  
(T15、西から)



1. 鏡坂1号墓  
南西突出部  
(T4・T7、西から)



2. 鏡坂1号墓  
填丘西側層位  
(T3、南西から)



3. 鏡坂1号墓  
填丘北側  
(T1、北から)

図版7 鏡坂墳墓群1号墓

1. 鏡坂2号墓  
全景  
(北から)



2. 鏡坂2号墓  
墳丘北西側  
(T2、北から)



3. 鏡坂2号墓  
西突出部  
(T3・T4・T7、南から)



図版8 鏡坂墳墳墓群2号墓



1. 富崎1・2号墓  
全景  
(T1~T6、南から)



2. 富崎2号墓全景及び  
富崎1号墓北西突出部周溝  
(南から)



3. 富崎2号墓  
南西突出部  
(南東から)

図版9 富崎墳墓群1・2号墓

1. 富崎3号墓  
填丘南裾層位  
(T1、南から)



2. 富崎3号墓  
填丘南裾周溝内  
遺物出土状況  
(T1、南から)



3. 富崎3号墓  
SK02土層断面  
(T10、北から)



4. 富崎3号墓  
SK02遺物出土状況  
(T10、北から)



5. 富崎3号墓  
南西突出部基部  
SK01東側遺物出土状況  
(T12、南西から)



1. 富崎3号墓　南西突出部基部SK01  
(T12、東から)



2. 同左土層断面  
(T12、北から)



3. 富崎3号墓  
墳丘西縁  
(T2、西から)



4. 同左遺物出土状況  
(T2、西から)  
5. 同上  
(T2、北から)



図版11 富崎墳墓群3号墓

1. 富崎3号墓  
填丘北裾層位  
(T4、北西から)



2. 同上遺物出土  
状況  
(T4、東から)



3. 富崎3号墓  
北東突出部  
(T5・T7・T9、北から)



4. 富崎3号墓  
北東突出部基部遺物出土狀況  
(T9、東から)



図版12 富崎墳墓群3号墓